

Title	藤田幽谷研究ノート
Author	大月, 明
Citation	人文研究. 29 卷 4 号, p.227-247.
Issue Date	1977
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

藤田幽谷研究ノ一ト

大月 明

横井小楠は、江戸にあった天保十年十一月二十五日に兄の左平太宛に、「来春は……二月余寒退き候時節より水府に遊学仕筈にて……。水戸は此許より纔に三十里余にて格別之遠藩にて無御座、且当時は一藩不怪盛に相成、追々此許より出懸申候者有之委敷様子も承り、幸水藩藤田虎之介知音にて……」と手紙を書き送り、天保以降における水戸藩と藤田東湖（虎之介）らの動向に深い関心を示したが、さらに福井滞在中の文久元年二月二十五日、熊本の萩角兵衛宛に、「江戸表は水府党類の為に何も心魂を被奪、他之事に及び不申候。水府之学問天下之大書を為し、扱々絶三言語申候。此許も有志者と被唱候者は大抵此学に陥入居申候處、小拙罷出候ては必死に打破り、今日に至り候ては先此弊害は消亡に至り申候。」と書いている。天保十年から文久元年までの二十二年間を経てみられる水府之学||水戸学の華々しい展開と、それに対する小楠の激しい批判をみる事ができるが、東湖はすでに六年前の安政二年に亡くなっている。(いずれも山崎正董編「横井小楠遺稿」による。)この小楠の水戸学観察は、半面小楠の思想遍歴の跡でもあるが、水戸学を肯定するにせよ否定するにせよ、水戸藩及び水戸学の動向が、この当時の人々にとって関心の的であったことは間違いない。

ほぼ天保期以降、政治思想としての機能をようやく示しはじめてきていた尊王攘夷思想、及びその担い手たちの活

動については、例えば水戸藩の尊王論は、長州藩のそれに比べて、高所より宣伝するを主にし、政治的よりも宗教的であったとする見解（三宅雪嶺「同時代史」第一巻元治元年の項）もあるように、それらの内容は一概にはいえないが、明治維新の展開をみると、たえず強調されてきたことであった。そして、この尊王攘夷運動家とその人々の思想形成において、あるいはまた小楠の場合にみたように、幕末の政治・社会に関心をもつ多くの人々の思想形成において、水戸学、とくに後期水戸学の占める部分の大きいこともまた指摘されてきたことである。

この水戸学について、私はさきにもその前期の学者、三宅観瀾と栗山潜鋒を取り上げ、その学問・思想を考察したが（「前期水戸学者の一考察」人文研究第19巻第8分冊・昭和43年）、その際、水戸学研究についての簡単な私なりの取り組み方や見通しなどを述べておいた。今ここで藤田幽谷研究を対象とすることに関連させて、その要点を取り出し、さらに敷衍して述べておきたい。

周知のように、厳密にいうならば、水戸学の内容は一派を形成したというほどのものではない。しかし、水戸藩における学問・思想の傾向を総称して特別な名称をつけることは、とくに幕末、他藩の人たちによって行われていた。小楠のいう「水府之学」はそれであったが、藩内でも、東湖が常陸の学、青山延干が水府の学などと呼び、あるいは安政頃、藩の呼名として実学と呼ばれることもあったというように、幕末にあって、水戸藩のもっていた思想的、そして政治的な傾向は、特色あるものとして自他共に認めていたのである。この水戸学のもつ内容について考えようとするとき、時期区分をして前期と後期に分け、その史的展開をみようとすることが多い。この時期区分については、単に前期と後期というだけではなく、さらに幾つかに区分する見解もあるし、前期と後期という区分にしても、それぞれの時期の意味づけ、とくに後期の内容についての理解の相違があつて論議の残るところである。私は時期区分について、前期と後期に分けて考え、前期を、徳川光圀によって始められた大日本史編纂事業を中心とし、光圀の没後、

天明期に幽谷が彰考館へ入る頃（天明八年）までとした。つづく寛政以後から、ようやく幽谷・東湖・会沢正志斎らによって、前期の伝統の上に立ち、外憂内患の政治・社会についても激しい主張と行動を展開し、やがて藩内における苛烈な対立抗争を引き起こしていく時期を後期とし、幕藩体制の崩壊と共にその本質的な活動を終わったとみたのである。とくに、後期の中心的人物であった東湖が安政二年に、正志斎が文久三年に亡くなり、また尊攘思想を軸とした政治思想の闘争が、文久から慶応にかけて、大きくかつ微妙に転換していく状態を考え合わせてみると、水戸学の政治思想としての展開は、文久から慶応にかけての時期、つまりは幕藩体制の崩壊と期を合わせて本質的には終わったのだといえよう。ただ水戸学を、幽谷・東湖・正志斎だけで代表させてしまうのは、後期においても一面的であろうし、水戸学の内容はそのように単純なものではないだろう。しかし、後期のみでなく、前期をも含めた水戸学の史的展開のなかで、もっともはっきりとした水戸学の実像を描き出してくれるのは、幕藩体制の確立から崩壊に至る封建社会においてであって、その生命は幕藩体制と共にあったといえよう。

即ち、幕藩体制確立期ともいうべき時期にあって、尊王思想を最大の軸とした光圀の修史事業は、体制イデオロギの確立と、体制に組み込まれるべき武士層の教育の問題のなかで考えられようし、光圀の修史事業に対する意図もいろいろ考えられようが、一つの観点は、以上のような体制確立期のイデオロギー政策の面が考えられるのである。その後史館の衰退もあり、享保後、宝暦頃にかけての古学派の人々からは、「水戸史局モ学者今ハ寥々タリ。名護屋十蔵総裁（名越南溪、延享二年総裁となる——大月）タリ。中々ヨキ学問ニアラズ。」（湯浅常山「文会雜記」卷之二上）の言も聞かれた。しかし、修史事業の継続と共に後期の活動がみられるようになったのも、一つには体制の危機と外国関係の緊張化という新しい政治環境下において、修史事業の伝統を土壌に、前期がかつてもった政治的意味の新しい強調があった。そうした考え方から、前期・後期のもつ一つの、しかしながら重要だと思われる特色を考えて

みると、前期と後期の結節点に存在する人物として、幽谷の存在が強く浮かび上がってくるのである。

以上のように水戸学の史的展開をみた場合、前期と後期の時代区分の必要性、またその両期の結節点に存在する幽谷、そしてそれぞれの時期の内容とその変化は、体制の展開に合わせて理解すべきであるが、とくに政治思想史的考察の面の強調を考えたのである。こうした観点の上に立っての前稿であったが、その主な内容は、先述のように観瀾と潜鋒についての考察であって、つづいて幽谷についての考察に入ることを考えているのである。

二

藤田幽谷（安永三年—文政九年）、諱は一正、字は子定、次郎左衛門と称し、幽谷はその号である。幽谷の水戸学における位置づけを、簡単なが私は前節で述べたように考えているのであるが、幽谷について、その存在をいかに評価するかということは、幽谷それ自身についての考察のみならず、後期水戸学の傑出したイデオログであった東湖の父であり、正志斎の師であったことからの考察、そして立原翠軒との対立をめぐる考察などから、古来幾つかの意見が出されている。以下では、まずそうした幽谷研究のなかから幾つかを取り上げ、その内容を簡単にみてみることから始めてみたい。

幽谷が、明治以降の水戸内外の人々から指摘されることの多い場合の一つは、文政十二年、藩主継嗣問題という紛糾のなかから斉昭が第九代藩主となり、やがて激しい藩内抗争が始まっていった幕末動乱に関連する場合である。明治維新以後、明治政府を中心とする他藩出身者、とくに、かつては水戸藩と共に尊攘派の雄として並び立った長州藩出身者たちの活動に対して、幕末、国内政治の表舞台中央に立つこともあった斉昭と、幾多の俊秀を失ったとされる藩内抗争についての水戸の人々による回顧が多くなっていったようである。坂井四郎兵衛「天保明治水戸見聞実記」

(明治27年)は、そうした回顧録の一つであるが、斉昭の襲封以後明治二年までの水戸藩内紛を詳述したものである。そこでは幽谷はどう扱われているかとみてみると、「第一回学派互ひに争ふて禍の根を貽す事」のなかで、「立原翠軒：才学衆人に超へすと雖も門人の教育引立方は相応に行届けとも風流学にて詩文書画等に専ら心を用るたり」とする一方、その翠軒の門弟幽谷は、「学問識見遙かに師の右に出て加ふるに当時天下の英傑高山彦九郎蒲生君蔵等と交誼最も深く其学風たる実用を本とし意を経世の略に注ぐを第一の主義とせり」と高く評価している。「見聞実紀」の少なくともこの部分が、藤田側に立って書かれている面を考慮しなければならないが、こうした翠軒と幽谷の対比は、その後も多いようである。そしてまた幽谷についての指摘も、党派紛争の遠因のなかで行われていたのである。この「見聞実紀」より少し遅れて刊行された、高瀬真卿「故老実歴水戸史談」(明治38年)に収める「続きのふの夢」も、「水戸に住で世に数へらる、程の人は一人として党禍に罹らぬはなし」と伝えることから、党派紛争の影響の大きかったことが想像できるのである。ただ「水戸史談」は、どちらの党派にも属さずに、天保以降の藩内政争に関する史料を集めようとしたものであるが、その序文に、「史筆の前に親疎なしの筆法に基きて、旧藩の内情、君臣の言行、すべて忌憚なく聞くがまに々之を記せり、ケ様に無遠慮の記事は水戸に於て曾て先例なければ」とあるところからみると、やはり水戸の歴史上の話題は、何といっても天保期以降における対立抗争であり、その回顧の多くが、斉昭、東湖、天狗党の側に立つものであったことが分かるのである。「水戸史談」は、その編集目的からしても幽谷にふれるところは少ないが、「きのふの夢」で、「水戸には義公(光圀—大月、以下同)、藤井紋太夫を手刀したまひし以来政治上の党派はなし武公(治紀)のおん時に立原の門下生より藤田治郎右(左)衛門出て師説に反対して一方に学派を立てたれども是は文字の上の事にて政治上の党派にはあらず、」というのがその一つであろう。(この「水戸史談」に集められた史料にも異説があるようで、山川菊栄「覚書幕末の水戸藩」にその例があげられている。)

以上は、明治期に刊行されたわずか二例にすぎないし、いずれも天保期以降の藩内政争を述べようとすることに主眼があったのだが、はじめ幽谷について述べられていたことは、翠軒との対立、即ち両者の学問と政治行動の差異であり、天保期以降における政争の端緒となる人物であったことの指摘が主であることが分かるのである。

ところが、こうした水戸藩幕末維新史への回顧を生み出した水戸藩、あるいは水戸学研究は、他方、明治以降の政治・思想の展開と密着しながら新しい傾向を作り出していったのである。かつての水戸学が強くなっていったものとき、尊王攘夷思想が、新しい天皇中心の国家思想とつながるものとして強調されていく傾向であった。それは、歴史的にみるならば、幕藩体制における史的展開でみられた水戸学の実像とは異なった、新しい体制下における、いわば水戸学の虚像であったともいえよう。例えば、栗田勤「水戸学本義」(大正15年7月講演筆記)「水戸学講話」(昭和19年に所収)は、万世一系の皇室を永遠に護持し、皇祖皇宗の遺訓を発揮し遵奉するにある「水戸学の大体は、……明治天皇の教育に関する勅語の御主旨と、一にして二、二にして一、実によく合致して居ると存じます。」という主張になっているのである。そうした新しい傾向の強くなっていく状況のなかでの幽谷研究を、さらに幾つかみてみよう。

翠軒との対比から幽谷をみてみようとすることは、先述のように外にも多いが、光圀の勤王思想と修史事業について述べ、幕末への影響をみようとした、高橋義雄「水戸学」(大正5年)は、志表作成について消極的だった翠軒に対して、後年志表を完成していった幽谷を称している。が、新しい水戸学研究の傾向は、昭和期に入るとその数を増してきた。水戸は、尊王思想の発源地であり、明治維新の先駆者であって、諸藩へ影響を与えたとみる北條重直「水戸学と維新の風雲」(昭和7年)は、藩内攘夷論の嚆矢であり、水戸学大成の気運を作るのに首位にあった人としての幽谷が、忠孝一源・政教一致を説いたことを強調している。さらに、戦前の水戸学研究では中心的存在の一人であ

った高須芳次郎は、「水戸学派の尊皇及び経綸」(昭和11年)の第三章水戸政教学の漸進、のなかの第二節から第六節にかけて、及びその他の部分で、幽谷についてふれている。高須は、大日本史を中心とした史業を水戸史学とし、この水戸史学と一脈の交渉をもちながら、烈公(斉昭)時代に新興した水戸政教学とに分けているが、それらを概括して、「水戸学とは、日本国体闡明に主点を置いて皇道発揚の精神を史学及び政教の上に明示した学問だ。」と定義づけし、政教学の根幹は、幽谷・東湖・正志斎の如き古学派的傾向をもった人々により作られたのであるとした。高須の指摘は多岐にわたっているが、「弘道館記」の思想と幽谷の思想とが内容的に酷似していることから、後期水戸学政教学の礎石は、義公について幽谷の手によって置かれたとするように、かつて藩内政争の端緒となる人物と回顧されてきたのとは異なる評価がなされているのである。外にも、儒学教育を基礎として、復古的傾向を高調し、学問と事業を合一せしめ、世に道を行うのに役立つ実学を奨励した教育論と教授法、神道に関してふれた文献はないが、「熊沢伯継伝」(蕃山伝)を書いたように、陽明学的要素にふれたものの存在、大義名分と華夷内外の弁を力説する彼の富国強兵論と対露観、農村救済策を立てた「勸農或問」についてなど、各方面にわたっている。しかし、幽谷の学問と思想について述べられるとき、多くが、正志斎の「及門遺範」、あるいは「下学邇言」などにそのままよってなされていることは、論証の弱点といえようし、先に水戸学の虚像と表現したが、水戸学の史的展開と、昭和期に高揚されてきた天皇中心の神国的国家思想との接合が、明示されていることと共に注意されよう。この虚像の傾向は、時代が戦時体制化していくとさらに膨張していくのである。ただ 幽谷・東湖・正志斎の如き古学派的傾向をもった人々、という点については、やや注釈が必要であろう。ここで使われている古学派的傾向という言葉は、幽谷の場合、「志学論」に明示されるように、孔子に帰れ、論語によるべきだという傾向である。この考え方は終生変わらないで、孔子の下位に孟子、そして荀子とつづくが、朱子については、その実学を賞揚するものの、主観に偏することを欠点と

して孔子に帰れと説くのであり、この孔子中心主義が正志齋にも継承されるのである。以上のようなところから幽谷らは古学派であるといわれるのであり、この表現は外にも使用されている場合があるが、徂徠学などの古学派理論にもとづく古学派学者という厳密な意味では、まだここでは使用されていない。なお、高須には、「水戸学徒列伝」（昭和16年）、「水戸学の人々」（昭和17年）などの啓蒙的なものもあるが、内容的には上述したところと差異はない。

こうした昭和期に入ってから研究の傾向に加えて、菊池謙二郎編「幽谷全集」（昭和10年）の外、「水戸学全集」・「水戸学大系」など史料集の刊行もあり、研究の影響する部分も広範囲にわたってきたが、幽谷個人の研究書もようやくみられるようになった。その一つ、西村文則「藤田幽谷」（昭和15年）は、幽谷の伝記と評伝をまとめたものである。西村は、光圀中心の第一期を経て、百八十度の転換を行わしめた、天明から文化にかけての約三十余年間が第二期で、第一期の大日本史編纂の水戸学に武装せしめて、これを実学に導きたる人、即ち翠軒とその門下幽谷がこの時期の代表的人物であって、この中興時代の思想と潜勢力が、第三期、烈公時代の動きを導いたとするのである。さらに幽谷は、孝道実践家であり、尊王攘夷論の首唱者であったが、同時にまた、父の家業（古着屋）の卑しさを打ち消すに足る地位は、寝ても覚めても幽谷にとって忘れえぬものであったに相違ない。その学風は、どの学派にも泥まず、義公唱道するところの勤皇精神に立脚したものであるが、そもそも大日本史編纂終局の目的である大義名分高揚に資するためには、義公以来、どんな学派・学者でも集めて、それらの特性を悉く義公化し、水藩化し、そして大日本史編纂、皇道顕揚に至ったので、幽谷の学問は、この大方針に合致したものであるというのである。幽谷は、翠軒と共に斉昭以降の水戸学の展開を準備した人、実学の人として位置づけられたが、その学風については、光圀以来の水戸学の伝統とされるものに直結されているのである。やはり水戸学における幽谷の存在を高く評価し、いわゆる幽谷学の水戸学における歴史的な位置づけを示したものととして、瀬谷義彦「水戸学の史的考察」（昭和15年）がある。瀬谷は、国体論

を枢軸とする幽谷の学問の発展的形成を五期に分けて考察し、さらにその国学的教養や武道面にも論及して実学的精神を分析したが、その指摘する重点は、水戸学の時期区分を前期・中期・後期に分け、前期と中期（元文頃から天明期）における義公精神の内容と、義公没後における義公精神や大日本史編纂の継続を述べ、そして後期を復活期（寛政から文政）と完成期（天保以降）とし、頼房（初代藩主）から享保頃までの前期の内容が、中期を経て後期へ入って完成させられたものであるという点であり、とくに幽谷の存在を核として、天明期から化政期へかけての体制動揺期に、前期の内容を復活させていくのだとする点であった。前期の内容が、後期に入って完成させられていったのだとする見解には異論を持つが、水戸学の歴史的展開のなかに幽谷の存在を位置づけた史的考察として、戦前の幽谷研究においては興味ある指摘であった。

しかし、聖戦完遂を呼号する戦時体制の強化は、研究者に大きな影響を与えて、水戸学研究の深化ではなく、水戸学の特色とされるものを超時代的に当時の時勢により密着させようとする動きも強まった。立林宮太郎「水戸学研究」は、はじめ大正5年に刊行されたというが、今、昭和18年版をみてみよう。水戸学の展開については、義公中心の第一期と烈公中心の第三期の間に、文公（第六代藩主治保）中心の中興時代、復古的水戸学の時期をおき、そこに翠軒・幽谷の存在を位置づけ、幽谷について略述していることは他書と大差はない。この書は、中等学校の国民精神涵養資料として記述されたものであるが、大東亜戦における連戦連勝の皇軍魂、これこそ真の水戸学精神の花であり実であるとする立場に至っては、戦時中における水戸学研究の一斑を如実に示すものといわざるをえない。菊池謙二郎「水戸学論叢」（昭和18年）も、尊皇思想・名分論・国体尊嚴説、及び皇化主義は、烈公時代の水戸学の根底をなしたもので、幽谷はこの水戸学上特殊の地位を占めているといわねばならないとし、文化五年元旦の詩から「宇内、至尊天、日嗣、須下令三万国、仰皇朝上、」をあげて、彼が皇化主義を抱いていたことは明らかで、単に尊皇思想を抱

き、君臣の大義を明らかにせんと努力したばかりでなく、万世一系の天朝の尊嚴は宇内に一つであるから、天朝の徳化を万国に及ぼし、世界に光被せしむべしという皇化主義の理想を抱いたのであるという。もちろん、こうした傾向を持つものばかりではない。遠山茂樹「水戸学の性格」(「国民生活史研究 生活と思想」昭和19年)は、光圀中心の前期における尊王思想の性格と、治紀・斉昭中心の後期における尊王攘夷思想の内容を分析して、明治維新の推進力であった尊攘思想の封建制に対する性格を考察した研究で、戦後における研究にも影響を与えたものである。なかでも後期の尊攘思想は、動機目的において直接現実の政治と結びついて、排幕府でも反封建的でもなく、幕府を介しての尊王であり、封建的階層道德の最高の一環としての尊王であり、攘夷も幕府の存在と背馳するものではなかったことを論じた点はその一つである。

三

以上は、戦前、幽谷について論及している研究のなかからその一部を取り上げ、幽谷研究、ひいては水戸学研究の展開をみたものであるが、そこでは研究の進展と併せて、時勢に密着していった傾向がみられたのである。一九四五年以後、戦後の研究には、まずそうした傾向に対する批判が強くなったのであるが、じらい三十年以上を経て、水戸学研究の内容と現状に対しては、なお多くの批判がつづいているのである。例えば、橋川文三「水戸学再考」(「日本学名著」第29巻付録の対談、昭和49年)は次のように述べている。「水戸学というのは、有名なわりに、内在的な理解がおこなわれていない。乱暴な分け方をしますと、旧水戸学イデオロギーをそのまま信奉するという態度が、一部水戸学研究者の一つの傾向であり、もう一つは主として、戦後の歴史学研究で、これは逆の意味で、水戸学についての定説をつくってしまったわけです。それは究極的には幕藩体制を擁護しようとする最後の試みであるというふう

規定するわけですね。さらにもう一つのタイプは、平泉澄さんのお弟子さんたちがやっている日本学協会、それは客観主義的、実証主義的な方法で、水戸学の形成過程、主として初期の水戸学とか、義公の思想の形成過程を問題にしているが、この場合は後期ないし明治以後の水戸学についてはほとんど言及がない。それぞれとってみますと、ぼくにはどうももの足りない。(中略) 簡単にいいますと、水戸学を解放したいという気持があります。水戸学はある少数の信奉者たちが、フアナティックに信奉するものではなくて、普通に思想関心をもつ人だったら、だれでも興味をもってしがるべき一つの学問の流れ、思想の流れであったということをまず立証することが水戸学のためにもいい、そんな感じがあったわけです。」これは従来の水戸学研究についての簡単ではあるが研究史であり、アプローチの方法であったが、同時によく研究の現況を説明するものといってもよいであろう。

それでは、戦後の幽谷研究とそれに関連する水戸学研究はどうであったか、その幾つかについてふれてみたい。まず、吉田一徳「大日本史紀伝志表撰者考」(昭和40年)では、当然、編修をめぐる水戸学派分裂の問題から、翠軒と幽谷の学風の比較が行われたが、幽谷の学問と思想については、「及門遺範」・「下学邇言」に主としてより、大義名分・王霸の辨・内外の分を重んじ、国体の本義に徹することこそ経世済民の学の第一義でなければならぬということが、幽谷学の根本理念であるとしている。また瀬谷の書と同じく、義公精神を復活し、これを発展拡充させることを生命とするのが幽谷の思想の中核としているが、翠軒の学は詞賦文章を重んじ、幽谷の学は経済実用の学であって、国体思想・正名論にも差異があり、思想的行動形態においては、翠軒は現実肯定主義に傾き、幽谷は現実打破、義公復帰の革新意識に燃えていたと対照的に比較し、そこに修史事業をめぐる意見の対立をきたした原因をみようとしたのである。ここにみられる幽谷像の内容は、戦前からの研究に通じるものであるといつてよいが、戦後の幽谷研究・水戸学研究において、新しい方向を示そうとするものがようやくみられるようになった。

「日本思想大系53 水戸学」(昭和48年)は、幽谷の「正名論」・「校正局諸学士に与ふるの書」・「丁巳封事」の校訂本や注釈を収めているが、この「水戸学」所収の解説の諸篇は、そうした一つの成果であるといえよう。それらを読みみよう。瀬谷義彦「水戸学の背景」は、水戸藩の動向について考察し、水戸藩にとっての定府制の持つ意味を各方面から示されたが、藩政のなかで彰考館の歴史を概観するとき、明暦三年から正徳五年、正徳本「大日本史」(本紀七三卷・列伝一七〇卷)が脱稿するまでの五十八年間を前期とし、享保元年から天明八年までの、修史事業にとっても藩政にとっても不振の七十二年間を中期とし、大日本史編纂に積極性と学問復興の兆しがみえ始めた、寛政元年から明治四年に水戸藩が解体するまでの八十一年間を後期とし、各期毎に、大日本史の執筆・校訂に関係した主な彰考館員について、その出身地などを調査し、前述した旧著における、時期区分などの論点をさらに進めていった。その調査によると、前期では水戸藩出身者の二倍半近くもあった他地方の者は、中期になるとわずかな数に激減して、水戸藩出身者が前期に比して倍増し、他地方の五倍近くにもなるが、この時期初めて藩内の庶民から二名の入館者を出すという注目すべき新傾向があった。その二名とは、地理学者長久保赤水と幽谷である。後期はさらに他地方の者は減じて二名となり、水戸藩出身者は四十二名を数え、庶民出身が四名、うち二名が総裁に選任されている。しかし斉昭が藩主になると、江戸史館は廃止されて、彰考館は水戸一本となり、藩校弘道館と共に水戸藩文教の中心となったが、それにもまして著しい後期の特色は、学者間に藩政危機に対応して農政論が興ったばかりでなく、対外的に危機意識が昂揚され攘夷思想が発生したことは、とくに寛政から化政期にみられる水戸藩の新しい傾向であった。この中期から化政期にかけての水戸藩の学者たちの新しい傾向をリードしたのが翠軒であり幽谷であって、東湖や正志齋らがつづくのである。今井宇三郎「水戸学における儒教の受容——藤田幽谷・会沢正志齋を主として——」では、正志齋の「及門遺範」によって幽谷学を素描しているが、その教学綱領と「弘道館記」にみえる教学綱領とに全く相違点

がないところから、「及門遺範」の述べることの妥当性を認めている。それは、東湖や幽谷門下の手になる「弘道館記」が、その教学綱領において、師のそれと酷似していることの方がむしろ当然であると思われるからという理由もあるのだが、また、幽谷の学問を語るときの必須文献である「及門遺範」の内容が、館記と相似点を持つことに、正志斎の主観的な見解が混在しているのではないか、との疑念を抱かせるということに対する反論も含めての結論であった。尾藤正英「水戸学の特質」は、従来の水戸学研究の持つ曖昧さを鋭く突くと共に、水戸学という概念は、天保期を中心とする水戸藩の学風を指すのであって、その内容にも、朱子学から徂徠学・国学へという学界の潮流と、それに照応する大日本史編纂事業内部の変化のあることを指摘し、とくに幽谷と徂徠学の影響、そして編纂事業としては、寛文から享保・安永頃までの前期における人物中心・道德本位の歴史思想から全く脱却し、一つの国家の命運の長短を決定するものとして、制度の在り方を重視する歴史観に立脚していた人物として幽谷をあげ、また志表の編纂方針においても、前期の儒教的合理主義的歴史観から、天明六年以後の後期の神話的歴史観へという、思想的立場の転回が示されていることを指摘したのである。この寛政年間を中心として、編纂事業が急角度な思想的転回を遂げるにいたった、その動きを最も強力に推進したのが幽谷であり、幽谷によって新しい水戸学の立場の基礎が定められたとみることができると。この幽谷の政治思想と行動を、「正名論」と「丁巳封事」などからその名分論の強い主張や具体例を示し、この「正名論」が、水戸学の出発点ないしその原型をなすものであったとしている。幽谷の存在が、水戸学の歴史のなかで画期的なものであることは、古くからいわれてきたことであるが、学界の潮流のなかからの徂徠学の影響、及び編纂事業にみられる思想的变化を推進した幽谷の思想内容を、新しい観点から示したのである。以上の三篇には、水戸学の概念規定、時期区分の問題から、幽谷関係の史料批判、あるいは幽谷と徂徠学との関係など、それぞれの論点に差異があるのは当然であるが、なお検討すべき問題点もあると思われる。しかし、水戸学を対象と

する歴史学研究としての幾つかの指摘は、今後の興味ある課題であるといふことはいえよう。

先に、その水戸学研究批判を紹介した橋川文三は、「水戸学の源流と成立」(「日本の名著」第29巻、昭和49年)で、光圀の大日本史編纂事業から後期水戸学への展開について、興味ある論点を幾つか示したが、後期への変容については、やはり徂徠学の影響を強くみていて、水戸学の国体論について、徂徠学との関係から論及している。そして、寛政年間を一つの画期として、立原(翠軒)総裁時代の若い俊英たちは、義公の史学の上に徂徠学と陽明学の影響を交錯させつつ新たな展開を示し始めたことになるとしている。実態はよくつかめないところがあるが、この陽明学という新しい要素を水戸に持ち込んだことを、水戸学の立場からはほとんど口にされないとして、「熊沢伯継伝」(蕃山伝)のある幽谷から考えている。この幽谷は安永三年の生まれで、昭和四十八年はその生誕二百年に当たるといふことから、水戸では記念事業が行われたようだが、記念論文集「藤田幽谷の研究」(昭和49年)が刊行されている。その内容は、藤田家の系譜から、その封事、農政論、攘夷論、幽谷の家塾である青藍舎についてなどの諸論文を収めているが、実証的な研究も多い反面、例えば幽谷の「正名論」(寛政三年に成る。)冒頭の一節が、現代の資本主義や共産主義、また民主主義の痛弊を深く突くものであるといった論調もあることは、先述の橋川「水戸学再考」が指摘するような研究状況を、記念論文集からもうかがわせるものだといえよう。

この記念論文集は、いうまでもなく地元の水戸に生まれたものだが、やはり地元の「水戸市史」の刊行や、「茨城県史」の編纂に伴う水戸学研究は、単に学問的展開にのみ問題を限るのではなく、藩体制全体の研究を踏まえての水戸学研究を可能にしていくものとして期待できるのであるが、やはり幽谷に限って、刊行済の「水戸市史」の成果をみてみよう。「水戸市史」中巻(昭和44年)の第十一章第三節(尾藤正英)・第四節(瀬谷義彦)では、寛政から化政期への政情推移のなかで、修史事業の再興と、立原・藤田両派分裂の動きへのなかでの幽谷にふれている。幽谷は、

翠軒の学問を継承して新しい方向へ発展させ、やがて翠軒と学問上政治上対立するようになったが、幽谷と、彼の学風を受け継いだ正志齋や東湖らによって築き上げられた学問と思想の体系が、天保の藩政改革の指導理念となり、また、幕末維新の際の藩外及び全国の政治運動に大きな影響を及ぼした。とくに、若い頃の「安民論」・「正名論」にみられる思想の性格、為政者としては、単に道徳上の修養を勉めるだけでは不十分であって、実際に政治上の効果が挙がるような方策を立てなければならぬとし、また君臣上下の秩序を重んじ、華夷内外の区分を明らかにしようとした点などをあげ、こうした思想から、「丁巳封事」などにみられる政治思想では、政治や経済の問題を道徳の問題よりも優先させる傾向が著しいものを生み出していくのであり、また君臣上下の秩序を維持して、体制の崩れを建て直そうとするものとなって現れているのである。さらに幽谷と、儒学の理論家・文献学者でもなく、経学の上では折衷学の立場に近く、学派に拘泥せずに儒学の実践に関心の強かった翠軒との比較では、とくに、学問・思想の相違について、翠軒以上に積極的に、天皇の地位が不変である日本の国柄の優秀性、及び朝廷と幕府の関係について、正しい名分を重んずる考えを述べた（「正名論」）点を例証としてあげている。中巻三（昭和51年）は、第十七章を「水戸学の発展と尊王攘夷論」としており、尾藤正英・伊東多三郎・鈴木暎一と執筆者は異なるが、若年の頃、幽谷が徂徠学に強く引かれると共に、半面その中華思想などを批判したことなどにみられる他学派との交渉、内憂外患の危機意識から生まれた尊王攘夷論と幽谷などについてふれている。そして、水戸学の実質は正志齋の「新論」で形成され、名実共に成立したのは天保改革期で、「弘道館記」の制定、弘道館の開設をもってその画期的事実と見なすことができるという立場をとり、この思想大系の完成と藩内外への宣揚には、斉昭の存在と幽谷門下の活動が主要な役割を果たしたが、幽谷の思想がその原動力となっている。即ち、水戸学の基調思想は幽谷により提唱されたとするのである。とくに、第一節「水戸学の形成と尊王攘夷論」の総括の項（伊東）において、水戸学の形成には、伝統に基づく思想の継受と

時勢の変動に対する新思想の活動とが経となり緯となって綾を成し、精彩を放っていること、水戸学における神道思想の意義、有志哲学―志士哲学と水戸学にみられる階級性の一面など、水戸学の歴史的意義を探る上での提言と共に、明治時代以降現代までの水戸学研究史にみられる水戸学観の対立について、対立の決着を急ぐべきでなく、それぞれ長所短所を含みながら、共に水戸学研究の進歩に役立つことが期待されようとしているが、このことは、現代に至っても、研究をめぐる環境に厳しいものがあることを語っているものであり、戦後の幾つかの研究にふれてみてきたことから、それは理解できることであろう。

「水戸市史」中巻(三)まで、幽谷についての数多いであろう研究のなかから、幾つかの研究に限って取り上げてみたのであるが、幽谷の学問・思想から行動にまでわたって、その内容・評価には、今後さらに検討し、解決しなければならぬ問題は多かった。しかしながら、水戸学において、あるいは近世思想史において、幽谷の存在はやはり傑出したものであったことは、意見のまとまるどころであったといえよう。そしてまた、そうした幽谷、ひいては水戸学についての研究の蓄積と共に、明治以降、とくに戦前の昭和期に入っては、時勢に密着したいわば水戸学の虚像を跳梁させ、大きな影響を人々に与えたことも認めておかねばならないであろう。先に、現代に至っても研究をめぐる厳しい対立があることは、戦後の研究からも理解できようと言ったが、そうした対立を、共に研究の進歩に役立たせようとするためにも、対立する問題点の明確化と、戦前の研究に対する反省、例えば水戸学の虚像に対する反省は必要だと思われる。

四

以上の通り幽谷研究のなかの幾つかについて簡単にふれてきたのであるが、そこで出されていた問題は、幅広く数

も少なくない。次にはその内容についての検討が必要になるのであるが、まずここでは、先述の前稿でも取り上げた栗山潜鋒と、幽谷との関係について考えてみたい。

幽谷の出自については、古くは、西村文則「藤田幽谷」、最近では、杉崎仁「藤田家の系譜について」（「藤田幽谷の研究」）に詳しいが、水戸郊外の常陸那珂郡飯田村（現那珂郡那珂町飯田）に住む農家であった藤田家が、村の荒廃の下に水戸に出てきたのは、宝永・正徳年間か、遅くとも享保初年頃、彼の祖父の時代であって、水戸では古着屋を開き、幽谷の父言徳が後を継いだ。言徳の長子の時徳が家業を継ぐが、安永三年二月十八日に次子として生まれたのが幽谷で、飯田村時代とは異なり、当時は、「先生の父を與衛門言徳と云商賈を以て活計とす頗る富をなせり」（石川久徴「幽谷遺談」——「幽谷全集」（以下「全集」という。）所収）という状態であったようだ。幽谷が翠軒の門に入るのが、天明三年十才の時であり、十五才の天明八年に藩に召し出され、「史館小僧」となっている。その後、寛政八年二十三才の頃まで、翠軒門にあり、また彰考館において勉学をつづけ、あるいは交友を通じてといった研鑽を積むのであるが、翌九年、大日本史の題号についての意見を出して、師翠軒との対立が顕在化し、また「修史始末」を著す外、「丁巳封事」を提出して、不敬の罪で免職になっている。こうした思想的政治的行動の時期への準備と胎動の時期が、ほぼ寛政八年頃までの時代であったろう。幽谷は、思想・学問の形成においていかなる影響をうけたか、については諸説があるが、先人の水戸学者のなかでは、栗山潜鋒から強い影響をうけている。「及門遺範」はその冒頭の部分で、「成童讀_三保建大記、憤発興起、從_レ此好_三讀書_二倍_三他日_一」（文久元年版）と述べているが、「保建大記」（以下「大記」という。）は潜鋒の著書であり、保元元年から建久三年までの間、即ち武家政権成立に至る事情を述べたもので、彼の没後十年の正徳六年に刊行されている。また天明八年五月、翠軒にあてた「呈_三伯時先生_二」（「全集」所収）では、十五才の幽谷が潜鋒の「倭史後編」を継ぐ志を述べており、「修史始末」（「全集」所収）巻之下の宝永三

年四月七日、潜鋒没する日の条では、「潜鋒先生之學術文章。其槩見於保建大記一矣。正大之論。雅健之辭。使三人推服不能自己。」としている。幽谷が潜鋒に強い関心を持っていることを語っているが、先述の研究のなかでは、潜鋒をどうみているだろうか。例えば高須芳次郎「水戸学派の尊皇及び経綸」は、潜鋒は前期水戸学において崎門学派の系統を引く一人で、「大記」の内容からみると、彼は、「神皇正統記」に由来する三種の神器の絶対的尊嚴を強調すると共に、祭政一致主義の復古更生から天皇親政を望んだのだとし、戦後の研究でも、吉田一徳は、崎門学者として編纂事業に傾注し、義公精神をもっともよく体现して大義名分を明らかにした学者として指摘しているように、その評価の軸となる点は変わらないというものが多いようである。

この潜鋒の名は、その著書の内、とくに「大記」をもって幕末尊攘思想の降盛下に知られていた。水戸に関心を持った吉田松陰の「講孟余話」(「吉田松陰全集」第三卷)にも、「附尾 藤文公上篇末章と相照すべし。保建大記を読む一條」があり、神器と天子の正統一致を述べている。もちろん、幽谷と同時代人にも読まれていた。松平定信は、「讀書功課録」(「楽翁公遺書」上巻所収)安永七年(定信二十一才)の条に、大日本史・日本史賛・新安手簡などの書名がみえるなかで、「保建大記 自廿八日(恐らく十一月か一二月)閱之即終」と記している。しかも幽谷や定信らの以前にも「大記」の名は、土佐の人谷秦山(重遠)の「保建大記打聞」三冊(享保五年刊)によっても知られていたようである。秦山は、「(「大記」は一二月) 是ホド珍重ナ事ハナイ古今メヅラシイ書ゾ是コソ神道ヲ大根ニシテ孔孟ノ書ヲ羽翼ニシタト云モノゾ……日本ノ学者ハ只コノ様ニ学問ヲシナスベクモノゾ千萬祈祝ノ至也」と称賛している。秦山は山崎闇齋門で、浅見綱齋にも学び神道・儒学を学んだが、やはり闇齋門の若林強齋も、「大記」を(「神皇一二月」)正統記以来ノ書ニテ極メテ心アル珍重ナル編集ナリ」(「強齋先生雑話筆記」)と高く評価している。潜鋒も闇齋門下の桑名松雲に学んでおり、闇齋門下は、潜鋒の外にも三宅親瀾や鶴飼鍊齋らの名を水戸でみることがあ

た。そうした闇齋門であることを軸にしてみると、その内容からしても当然闇齋門下の人々によって評価され、珍重されていたようである。それがさらに定信、そして松陰らによって読み継がれていったのであるが、水戸の後輩たらんとする幽谷には大きな感銘を与えたのである。では、「大記」の著者であり、幽谷に影響を与えた潜鋒については、先述の評価の通りであろうか。私も先述のように潜鋒について考えてみることにあったので、幽谷との関連を考える前に、潜鋒について簡単にふれておこう。

潜鋒の主著が「大記」（「水戸学大系」第七巻所収）であることは、先述するところからも考えられるが、その外に「倭史後編」（「甘雨亭叢書」所収）があり、また彼の遺文を集めた「弊帚集」（「甘雨亭叢書」所収）がある。まず「大記」の特色の一つは、三種の神器についての厳格な、絶対的な価値を持つものとしての規定と、それに基づく神器主義ともいえるものがあった点である。さらにそうした神器主義は、武家政権＝霸道論難の根柢になるのだが、同時に天皇・上皇側に非のある時はこれを突くなど、是々非々主義の立場をとり、とくに天皇は政治に長じ、臣に仁であるだけではなく、親に孝、子に慈であらねばならないという。つまり天皇は、全人格的に徳の完備し、政治に長じた完全な存在であるべきで、これが神器の存在と共に天皇親政のための必要条件である。天命の下に、私としての人格と公的人格とが同一視されるのであり、上（法）皇もまたしかりである。そうした天皇の徳に順い服するという感化の下にあっては、鎌倉幕府の創設とその後の武家政治の展開は肯定され、また天皇親政へと復古するための要件は、天皇の全人格的完成であり、自修の必要であるというもので、公私共に条件を完備した天皇の下における、条件付の幕府存在肯定論であり、同時に神器主義を併せた尊王論であったのである。「倭史後編」は、「大記」につづく時代（後小松天皇―後花園天皇）の幕府論・將軍論を志したもので、「南朝之凶。雖曰由逆賊。而天命之所歸。」とするなど、「大記」に通じる面も多いが、実証的傾向も強く、また史実の羅列する部分も多い。しかし注意したいの

は「弊帚集」の幾篇かである。これは彼の遺文の内、災火を免れたものを寛保二年までに謄写したもので、彰考館に収められたが、元禄年間に書かれたものが多いようである。そのなかから、元禄九年、森尚謙が藩士教育のために水戸へ赴く際、潜鋒の書いた「送三森大兄之三常陸序」をみてみよう。藩体制の整備もまともうとする時期、土産人物粗であるとされる水戸藩士の教育について、森への助言として次のように述べている。「君教レ之。以三名義倫理。所二頼而存一。則爲レ子者孝。爲レ臣者忠。而後風俗漸可レ淳也。人才漸可レ振也。禮樂漸可レ興也。(中略)名教赫然。大節確乎。身杖三信義一。處レ死罔レ貳。竊惟是我侯命レ君之意也。若徒鼓三舞仁義一。而饒三倖禄利一。作三爲文章一。而眩三耀耳目一。則其終遂至三視レ利遺レ親。捨レ義取レ生耳。豈可レ不レ懼哉。使三我侯他日受三其慶一耶。君也。受三其害一耶。亦君也。」と。潜鋒が藩士教育で強調したのは、いたずらに仁義・文章をもってするのではなく、名分・倫理を教えることで忠・孝觀念を確立し、信義大節を重んじ、死を恐れぬ武士を育て上げること、これは、藩主(第三代綱條、光圀も存命中である。)の期待することでもあろうというのである。また「讀三関城書一」では、友人の三宅觀瀾が、藤原藤房の「見レ危而諫。諫而不レ聽則去。」としたことを高く評価したのに対して、潜鋒は、北畠親房の「辛勤漂泊。雖レ似不レ若三藤房之果決勇退一。其忠厚惻怛。憂レ世之誠。蹈三萬危一而益固。其慷慨慄烈。敵愾之志。濱三百死一而不レ屈者。未三必不レ出三藤房之右一。」と評価するのである。これらの外に、学問については、記誦詞章にこだわり、実践を怠る弊害を述べている。

以上のわずかな例からではあるが、潜鋒の論ずるところからその特色をまとめてみると、元禄・宝永期における、鮮明な水戸藩士・史官としての倫理観と、強い精神主義的傾向の持ち主であったといえるであろう。幽谷は、それから約八十年ほど遅れた天明期、体制も時代もそれまでとは大きく変化していこうとする頃に、翠軒門・彰考館で学ぶようになり、潜鋒の仕事の後を継ごうとする志を述べている。潜鋒については、早くからその著作を読む機会が

あり、その後も史館などで潜鋒のものに接することが多かったであろう。幽谷は、富裕ではあるが古着屋の次子であった。その才能によって史館小僧となり、藩士・史官としての身分をえるようになるが、恐らく幽谷は、外の藩士たち以上に藩士・史官としての意識を強く持っていたであろう。かつて西村は「藤田幽谷」で、父の家業の卑しさを打ち消すに足る地位は、幽谷にとって忘れえぬものであったに相違ないと推量したが、むしろもっと積極的に武士であろうとし、武士としての学問・思想、そして政治への道を真剣に体得し、歩もうとしたと思われる。そうした幽谷の姿を考えてみると、若年以来の幽谷が、「大記」などを通じて潜鋒から強く影響をうけたということは、先述のような論点と特色を持つ潜鋒に強く引かれるものがあったからだともいえよう。「大記」にしても、その尊王論は内容からいって、当然、元禄・宝永期と異なった解釈と力点のおき方が可能である。潜鋒は、幽谷にとって藩士・史官としての一つの理想像であり、「大記」は、幽谷の学問・思想に強い刺激を与えたのである。

幽谷についての問題点の多いことは先述したが、紙幅も尽きたので、本稿では、まず幽谷と潜鋒との関係についての私見を述べるにとどめておきたい。(未完)